

養殖エビは 安全性と環境負荷に問題!



マングローブの林がエビの養殖場になり環境を破壊しています。

集約養殖と早期死亡症候群の因果関係

早期死亡症候群の発生を受けて、2011年にベトナム政府は養殖業者に聞き取り調査を行い、エビ養殖のあり方と病気との因果関係を調べました。病気との関連が疑われる危険因子は、以下のものでした。

- ① エビを過密に飼うこと(集約養殖)
- ② 殖場の規模が大きいこと
- ③ エサに抗生物質などを添加していること
- ④ 池の保守管理で農薬を使うこと

調査に携わった専門家グループは、「比較的事故が少なかった時期に養殖現場でみられた安堵感が気のゆるみを招き、それが早期死亡症候群・急性肝すい臓壊死病の



ような新たに発生した予期せぬ病気に対する脆さにつながった。(調査で)明らかになったのは、養殖場のお粗末な管理体制と基準を守る意識の弱さである」と述べています。

抗生物質使用と抗生物質耐性菌の問題

集約養殖場における抗生物質の過剰使用は周辺環境を汚染し、地域住民の健康を損なっています。タイの調査では、インタビューに答えた76業者のうち74%がエビ養殖で抗生物質を使っていました。大半の業者が抗生物質を予防的に使用し、あるものは毎日使用し、少なくとも13種の抗生物質が使用されていました。有効で安全な抗生物質の使用方法について、多

くの業者は十分な知識がありませんでした。

たとえば、ほとんどの業者がプロバイオティクス(乳酸菌など)と抗生物質を同時使用し、ウィルス由来の白斑病(特効薬がない)の対処に、細菌性の病気を対象とした抗生物質を多量に使っていました。

- ① 抗生物質は飼料に入っています。エビが食べきれなかった分はそのまま池底に沈殿します。
- ② エビが摂取した抗生物質も、60～85%が薬物活性を保ったまま糞に混じって排泄されます。
- ③ 飼料残渣や排泄物由来の抗生物質は、エビ養殖池から周辺水系に移行します。
- ④ 環境中で分解消失しなかった一定量の抗生物質は魚貝類や甲殻類に取り込まれます。
- ⑤ それを地域住民が捕食することで、抗生物質はヒトの体内に取り込まれます。

このプロセスのなかで抗生物質耐性菌が発生すると考えられます。抗生物質耐性菌の問題は、エビが病気になっても抗生物質が効かず被害を食い止められないというだけにとどまりません。耐性を持った細菌が拡散して、人の健康にも影響を及ぼしかねないことを意味するのです。

(参考：名古屋生活クラブ「たねまき」7月1回)